

居住空間におけるくつろぎ場の形成

一宮古群島におけるモノ・空間・実践からの考察一



K10035 柏女有紀恵

Keywords

くつろぎ モノ 実践
空間 ユクウ

1. はじめに

1.1 研究目的

誰もがストレスを抱えている現代社会において、くつろぎの場は重要である。人が最もストレスから解放されるのは、自分の居住空間の中のプライベートな空間だと考える。居住空間の中でも、くつろぎ空間はストレスを抱える人間には欠かすことができない場だ。

ここでひとつの疑問が浮かぶ。くつろぎ空間とは、一体どのような要素によって組織されているのか。本論ではくつろぎ空間がどのように成立しているのかを追及する。居住空間内のくつろぎの場をモノに着目し、その要素や発生条件を示すこととする。モノを調査することで、人がその空間で行う動作や、その人の嗜好・考え方も明らかにできると考えられるからである。また、モノ、実践、空間の関係に着目し、この関係がどのように成立しているのかも明らかにする。

本研究では、実際にフィールドに赴き、調査をおこなった。対象住居のくつろぎ空間をデータ化し、調査地でのくつろぎ空間の特徴を示す。また、その特徴が現代住居の計画においてどのような意味をもつのかを考察する。

1.2 研究方法

本研究の調査地は沖縄県宮古島市下地字来間で、調査期間は2013年8月17日～8月31日である。調査を行った住居数は22軒、調査内容は、くつろぎ空間や行為についての聞き取り調査、その空間にあるモノのスケッチと実測、それらのモノの写真撮影である。

聞き取り調査では住み手の生活スタイル、くつろぎ空間やその場についての質問を中心に行った。その際に、住み手が「くつろぐ」という概念をイメージし易いよう、宮古島の方言「ゆくう」という言葉を用いた。これは「活動を中断して心身を楽しむ。」といった意味をもつ「休む」という実践の宮古島方言である。これを踏まえて、以降の来間島のくつろぎ空間のことを「ユクウ座」と述べる。これらの調査に加え、生活スタイルや地理的条件、伝承される神話などに留意しながら研究を進める。

1.3 先行研究の検討

文化人類学者の石毛直道は著書「住居空間の人類学」で住居を人、モノ、空間によって構成されるシステムと考えるとき、以下の図式が成立すると示している。これ

らはどの要素が先行しているという順序はつけることができず、互いに関わり合うことで成立している。本研究ではこの考えを援用し、「人」を慣習的な動作を意味する「実践」と読み変え、調査住居におけるモノと実践を調査し、空間を読み解く。また、抽象論であるこれらの関係を具体的に考察し、実践、モノ、空間の相互作用という観点から、現代住居における意味を明らかにする。

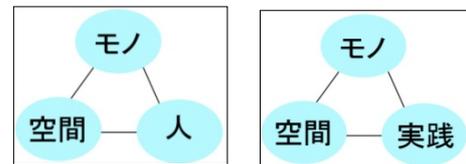


図 1 石毛による住居内のモノ、人、空間の関係(左)

図 2 本研究での住居内のモノ、実践、空間の関係(右)

2. 調査地の概要

2.1 地勢・人口・生業

来間島は宮古群島の1つで、北緯24度～25度、東経125度～126度を結ぶ網目の中、宮古島の南西約1.6kmに位置しており、面積2.84km²の小さな島である。島全体は南西方向に45度程度傾いており、北東側の崖の上に住居が立地している。また、1995年3月に来間島と宮古島を結ぶ全長約1690mの来間大橋が開通した。以降島民も島外の人々も容易に行き来ができるようになった。

平成22年10月の人口は157名(男性75名、女性82名)であり、総世帯数は80である。また、全島民の51%以上が高齢者である超高齢社会であり、15歳未満の人数が8名という少子社会でもある。

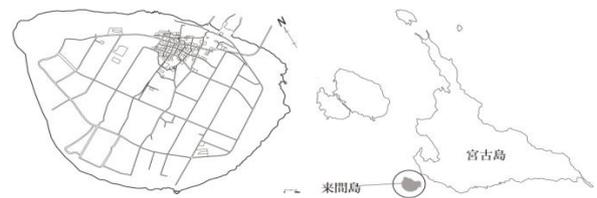


図 3 来間島の場所

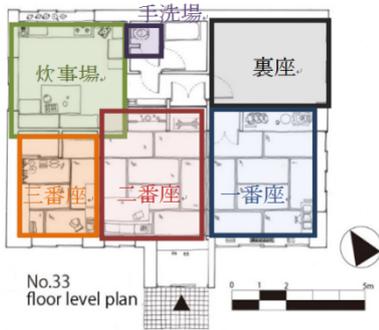
2.2 祖先崇拜

来間島の人々は、仏教的観念には無頓着であるが、仏壇を住居内に所持し、毎日供え物をし、手を合わせている。仏壇は長男家系が受け継ぐ。また、この地ではお盆が重要視され、毎年旧盆の時期になると、親族が仏壇のある住居に集まり、皆で手を合わせる。そうすることに

より、祖先への感謝や、子孫への慈愛の精神を持ち続け、人々の心の安らぎや、安定が得られると考えられている。

3. 来間の住居

3.1 住居の変遷



この地方では人々が生活を行う主屋、トوغラもしくはカマヤと呼ばれる炊事棟の2つが存在した。

主屋では接客に用いられるのが1番

図 4 来間島住居における現在の座、親しい人を招いたり食事をしたりする場が2

番座、1番座・2番座の奥にある空間が1番裏座・2番裏座と呼ばれる。この呼び名は現代でも使われている。

現代の住居は主屋とトوغラが1つの建物にまとめられており、多くは平屋の鉄筋コンクリート造で台風に強い建物である。また、前述した通り、かつての呼び名が今でも使われているが、これは平面的計画がほぼ変化していないからである。以前は主屋外にあった調理機能、排泄機能が他の機能と1つになって主屋に取り込まれた他には、1番座、2番座などの配置計画はそれほど変化していない。

3.くつろぎ空間の分析

3.1 分析方法

ユクウ座の見下げパースを描き、そこに表されるモノの種類や配置から分析を進めてゆく。ユクウ座に存在するすべてのモノを以下の5つの分野に分け、「ユクイ」に用いられるモノを特に細かく見ていく。また、各分野のモノの分布を図中に示す。

- 第1分野…ユクイに利用するモノ
- 第2分野…1分野以外で頻繁に利用するモノ
- 第3分野…生活上のためのモノ
- 第4分野…不要なモノ
- 第5分野…装飾、思い出のモノ、信仰に用いるモノ

これらの分野設定の理由について述べる。まず本研究では、ユクウ座を調査したため、ユクイに利用するモノがあるのは明白である。第2分野については、ユクウ座ではほとんどの場合、他の実践も行われているため、モノからどのような他の実践や機能がみられるのかを明らかにする事ができる。第3分野では生活に対する住み手の意識、第4分野は不要なモノがどのように保管されているのかを明らかにし、それらに対する住み手の考えを探る。第5分野では、インテリアや室内空間をどのように作り出そうとしているのかという住み手の美意識につ

いて明らかにする。また、これらは実践には直接関係していないとしても、住み手に心的影響を与えるモノがあると考え、それが一体何か調べる。

また、モノについての分析に加えて、その場の環境、空間がどのように工夫されてできているのか等の特性からも分析を行う。

3.2 分析事例～住宅番号12～

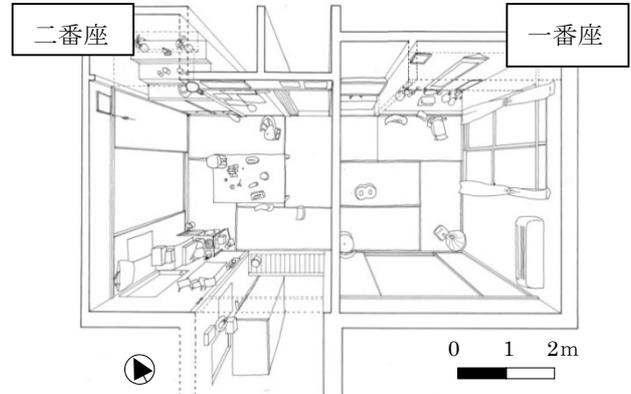


図 5 No.12のユクウ座見下げパース

居住人数：3人（91歳女性、65歳男性、61歳女性）

ユクウ座：1・2番座（91歳女性）/19.21㎡

ユクイ：横たわってポーっとする

大切なモノ：仏壇

総物品数：181（1㎡あたりの物品数：9.4）

表 1 各分野の物品数

分野	1	2	3	4	5
物品数（個）	5	114	7	3	52
総物品数に対する割合（%）	2.8	63.0	3.9	1.7	28.7

No.	1	2	3	4	5
1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1
6	1	1	1	1	1
7	1	1	1	1	1
8	1	1	1	1	1
9	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1
11	1	1	1	1	1
12	1	1	1	1	1
13	1	1	1	1	1
14	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	1
16	1	1	1	1	1
17	1	1	1	1	1
18	1	1	1	1	1
19	1	1	1	1	1
20	1	1	1	1	1
21	1	1	1	1	1
22	1	1	1	1	1
23	1	1	1	1	1
24	1	1	1	1	1
25	1	1	1	1	1
26	1	1	1	1	1
27	1	1	1	1	1
28	1	1	1	1	1
29	1	1	1	1	1
30	1	1	1	1	1
31	1	1	1	1	1
32	1	1	1	1	1
33	1	1	1	1	1
34	1	1	1	1	1
35	1	1	1	1	1
36	1	1	1	1	1
37	1	1	1	1	1
38	1	1	1	1	1
39	1	1	1	1	1
40	1	1	1	1	1
41	1	1	1	1	1
42	1	1	1	1	1
43	1	1	1	1	1
44	1	1	1	1	1
45	1	1	1	1	1
46	1	1	1	1	1
47	1	1	1	1	1
48	1	1	1	1	1
49	1	1	1	1	1
50	1	1	1	1	1
51	1	1	1	1	1
52	1	1	1	1	1
53	1	1	1	1	1
54	1	1	1	1	1
55	1	1	1	1	1
56	1	1	1	1	1
57	1	1	1	1	1
58	1	1	1	1	1
59	1	1	1	1	1
60	1	1	1	1	1
61	1	1	1	1	1
62	1	1	1	1	1
63	1	1	1	1	1
64	1	1	1	1	1
65	1	1	1	1	1
66	1	1	1	1	1
67	1	1	1	1	1
68	1	1	1	1	1
69	1	1	1	1	1
70	1	1	1	1	1
71	1	1	1	1	1
72	1	1	1	1	1
73	1	1	1	1	1
74	1	1	1	1	1
75	1	1	1	1	1
76	1	1	1	1	1
77	1	1	1	1	1
78	1	1	1	1	1
79	1	1	1	1	1
80	1	1	1	1	1
81	1	1	1	1	1
82	1	1	1	1	1
83	1	1	1	1	1
84	1	1	1	1	1
85	1	1	1	1	1
86	1	1	1	1	1
87	1	1	1	1	1
88	1	1	1	1	1
89	1	1	1	1	1
90	1	1	1	1	1
91	1	1	1	1	1
92	1	1	1	1	1
93	1	1	1	1	1
94	1	1	1	1	1
95	1	1	1	1	1
96	1	1	1	1	1
97	1	1	1	1	1
98	1	1	1	1	1
99	1	1	1	1	1
100	1	1	1	1	1

図 6 物品集計表

3.3 ユクイの方法【横たわってポーっとする】

住み手は高齢故に足を悪くしており、座位での生活は足に負担がかかるため、横たわっている状態が楽だという理由から横たわる事を好む。

3.4 ユクウ座の場所【2番座】

ユクウ座の場所は2番座だとされる。これにはいくつか理由が考えられる。

2番座は玄関と隣接しており、もし来客があったとしてもすぐに対応することができる。来客と言えども改ま

った人は来ず、気を許した友人や親族が多い。また、来間島では人との関わりが大切とされている。2番座は玄関に隣接しているため、来客があった際、すぐに室内に通すことができ、話し込むことができる。また、2番座はいわゆるリビングであるため、家族もこの場に集まる。さらに、この室は住居の中心に位置し、窓を開けると風が通り、エアコンを嫌う高齢者にとっては心地よい環境の場になると考えられる。以上の理由で二番座がユクウ座となると考えられる。

3.5 ユクウ座におけるモノ

ユクウ座の物品数は181で、そのうち枕3個・扇風機2台の計5個(2.76%)のモノがユクイに用いられている。これより、モノを多く使わずともユクイができると考えられる。

一方ユクウ座にあるがユクイに用いられない物品数は114個(63.0%)と大部分を占めている。これより、ユクウ座はユクウための室であると同時に他の実践を行うための空間でもあるということが出来る。本住居では2番座に調味料が存在することから、食事機能も併せ持っていると考えられる。

さらに、思い出のあるモノや信仰に用いるモノの数が52個(28.7%)と全体の約3割を占めていることから、思い出や信仰などの心的要素もユクウためには重要であると考えられる。

4 さまざまな視点から見るユクウ座

前述したような分析を全調査住居に行い、全22事例の分析結果からユクイとユクウ座のあり方を考察する。

4.1 ユクウ座形成の条件

表 2 ユクウ座の室内環境平均と快適数値

	調査平均	快適
風速 (m/s)	0.58	0.15~0.25
温度 (°C)	30.5	25~28
湿度 (%)	77.1	55~65
体感温度 (°C)	39.27	-

調査を行った住居のユクウ座の平均室内環境は表2の結果となった。これは、一般的に快適な室内状況と比較した場合、ずれている。これは本研究の調査対象者の年齢や来間島での価値観に関わりがある。高齢の為、エアコンを稼働すると身体的問題を起こす人々が多かった。また、エアコン等の設備は住み手が若かった頃には無かったモノで、長い間この地の気候の中で生活してきた人々は、この気候に体が慣れている。よって、定められた快適範囲外の数値の環境状況であっても、来間島の人々には全く問題ないと考えられる。

続いてユクイについて述べる。調査住居の8割以上が二番座をユクウ座に含んでいる。よって来間島におけるユクウ座はほぼ二番座であるということが明確である。

ユクウ際は「1人」が最も多く14軒、「2人」が11軒、「友人と」が1軒であった。

ユクウ方法は、「テレビを見る」、次いで「椅子に座る」という事例が多かった。「テレビを見る」が上位にあることは、ユクウ座の多くが二番座である事と関係している。テレビは大抵二番座やリビングに配置してある。また、人々はユクウ時、床や畳に直接座るよりも、何かに腰かけている状態の方が多い。これらの理由として多かったのが、「立ち上がるときに楽」というものだった。一方、床や畳に直接座る理由は「椅子に座っていると足がむくむ」というものが多かった。よって、住み手は自分の身体状況に合わせ、自分がくつろぐことのできる体勢でユクウ方法を決定しているのである。

4.2 モノ

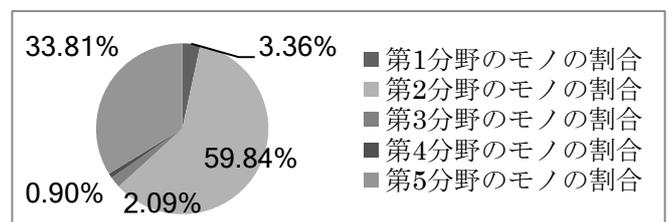


図 7 ユクウ座のモノの分野分け平均

次にユクウ座に存在しているモノに着目する。第1分野では扇風機(20軒/22軒)、リモコン、テレビ、イスが多く所持されていた。これらの普及率は高く、多くの住居でこれらを用いてユクウことがわかる。また、イス類が多いことは前述した通り何かに座ってユクウことが多いこととも関連している。

第2分野のモノは最も多く存在した。これは他の生活機能がユクウ座にあることを示す。最も多く普及していたモノは、19軒に存在したテーブル、18軒にみられたくずかごであった。テーブルは住み手だけでなく応接にも利用することができる。また、モノを置く、食事をするなど、多様な使用方法が可能のため、多くのユクウ座に存在した。また、特徴的なモノとして、害虫駆除スプレーやハエタタキが11軒にみられた。実際に調査を行っていた時期も、害虫が多く、温暖な気候であることと窓を開放していることが関係していると考えられる。これは、この土地の人々が気候やその土地の環境に合わせてモノを準備していることを示している。

第3分野で最も多くみられたモノは電話機(19軒)である。携帯電話やパソコン等を持たない代わりに、電話機は外部と連絡をする大切な道具であるため、多く普及している。

第4分野の平均値は1%未満であることから、ほとんどの住居で不要なモノがないという事がわかった。

第5分野はユクイには直接関係ないが3割以上を占めていた。最も多く見られたモノは壁掛けカレンダー22軒だった。これらは貰いモノが多かった。また、19軒に見ら

れた額も、多くは長寿祝い等で他人にもらったものが多かった。つまり、この地方の特徴として貰ったモノはできる限り使用し、無駄にしないということがわかる。続いて多く普及していたモノは植物で20軒に見られた。これは仏壇に供えられているものが多かったが、インテリアとして花等を玄関先等に飾っている住居もみられた。また、多くの住居で写真を配置していた。祖先の写真は仏壇に、子孫の写真は壁に貼られていた。また命名札は12軒の住居でみられた。これらのことから、共に過ごすことの出来ない家族を大切だと考え、それが写真や命名札となってユクウ座を構成するのである。

4.3 ユクウ座決定における重要事項

ユクイには「環境・快適性」「身体能力」「家族関係」「嗜好」等が関係している。最も多かった「環境・快適性による要因」は、それを行うことにより自身の快適性や心地よさが増すためである。続いて多かった「家族関係による要因」とは、同居人や家族とインタビュー回答者の関係がユクイと関わっていることを示し、「身体能力による要因」が多いことは高齢社会である来間島の社会状況が関連しており、住み手の体調によってユクイが制限されることがあることを示す。また心的要因、対人関係もみられ、人との関わり合い等が重要であることがわかる。

同様のことがユクウ座の決定についても言える。最も多い軒数に見られた「間取りによる要因」とは、ユクウ座が住居内で快適な場所であること、二番座である事が関わっている。

以上のような分析からユクイやユクウ座の決定の背景として、快適性や土地の自然環境、人とのかかわり方、個人の嗜好や体調、信仰が強く関連していることがわかった。

4.4 ユクイとユクウ座とモノ

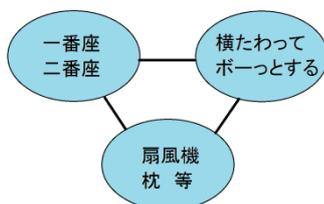


図8 住居番号12におけるモノ・行為・空間の関係

そこで、そこではユクイが行われることになる。ここで、モノを箸や調味料に変化させた場合、ユクイから食事に変化してしまう。前述したとおり、モノが空間の性質を象徴し、空間はモノに属性を与える。モノ・実線・空間がそれぞれ相互に成立しているのである。つまり、石毛が述べていた3者の相互関係は成立している。

住居番号12について、ユクイと、ユクウ座とモノの関係を図示すると左図のようになる。一番座・二番座ではユクイ以外にも多くの機能が存在し、実践も多様である。しかし、ここに扇風機や枕等といったモノを導入

5 まとめ

本研究では、図9のように個人が生まれる前から、その地に根付いている環境等を「先天的要素」、人が生まれてから獲得する、あるいは他者によって既に獲得された事柄を「後天的要素」と定義する。

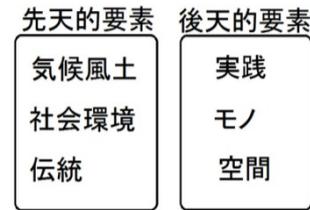


図9 要素の振り分け

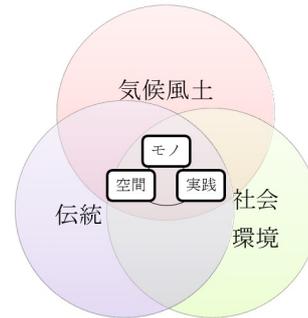


図10 要素の関係

ここでユクウ座について考える。前述した通りユクイやユクウ座を決定している背景には、個人を取り巻く先天的要素がある。よって、先天的要素の3要素が重なり合うその場で、ユクイが行われる。それを表したのが図10である。

先天的要素が全て反映された状態でも、モノ・実践・空間は相互関係を維持する。そして、この状態がユクウ座を成立させている根源であると言える。個人が生まれる前から長年にわたり構築され続けてきた先天的要素により、人々の価値観や観念は形成される。そして生後に獲得された後天的要素は先天的要素に大きく影響を受けて存在しているのである。これらの関係は、前述した石毛直道の考えと同様に、どれも段階的に成立しているわけではなく、それぞれが関係し合いながら相互作用として成立しているのである。

現代住居の計画においては、前述した関係性を落とし込み、活用する事が大切である。計画者がある空間をひとつの実践にのみ注目し計画するのではなく、その空間がどのような使用法で用いられるのかをよく吟味する必要がある。そして、空間の機能に可変性を持たせ、住み手による独自の生活スタイルを生み出させることが重要であることを本研究は示している。

参考文献

- 1) 商品科学研究所+CDI『生活財生態学・現代家庭のモノとひと-』
- 2) 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房, 1961年
- 3) 石毛直道『住居空間の人間学』鹿島出版会, 1971年
- 4) 内堀基光「もの」と人から成る世界』『「もの」の人間世界』pp.1-22 岩波講座文化人類学 第3巻岩波書店,1997年
- 5) 宮古島市ホームページ www.city.miyakojima.lg.jp/
- 6) 商品科学研究所+CID『生活財生態学Ⅲ 大都市・地方都市・農村・漁村「豊かな生活」へのリストラ』, 1993年
- 7) 今和次郎『考現学入門』筑摩書房, 1987年